# 親子のふれあいから、豊かな心とことばの育ちへ

## ～ブックスタートから始まる人づくり～

山形県金山町　栗田良恵

はじめに

金山町では「適切な時期に適切な教育を＝適時適育」の考え方をもとに、人間の発達段階に応じて子どもが経験すべきこと、親や周りの大人が働きかけすることが具体的に示されている。また、町唯一の認定こども園から小中学校における教育・保育課程は、保育指針や教育要領、学習指導要領とともに「適時適育」を柱とした構成である。（生涯学習・社会教育分野についても、同様である。）

その中でも、特に力を入れてきた事業「ブックスタート[1]」は、13 年目を迎えた。平成 28 年度、金山町は新たに「金山町子ども読書活動推進計画」を策定し、子どもの読書環境の整備と更なる学力向上に向けた取り組みを進めている。

しかしながら、ブックスタートのねらいは“親子のふれあいと愛着形成”、読書活動推進計画のねらいは“読書を楽しみ活用することを通じての心と言葉の育ち（学力向上も暗に含まれている）”であり、すんなりと一本道では繋がらないように感じられる。この繋がりそうで繋がらない 2 分野の担当を経験して自分なりに悩み、考えてきたことは数え切れないほどあるが、学校教育担当となって 3 年目の今、ひとつの疑念が生まれてきた。それは、発達段階のある節目における＜動機づけ＞となるしかけが必要だということである。さらに、そのことについてまだ当町の誰も気づいておらず手立ても分かっていない。

このような現状の中で、ブックスタートから始まる読書活動推進の事例を取り上げて、これまで当町で行ってきた良い取り組みや活動を大切にしつつ、実態に見合った持続可能な事業の再構築、発達段階に即した事業にとっての＜動機づけ＞について探ってみたい。また、事業を行う上で非常に重要である関係機関との連携についても触れてみたい。

## １．金山町の現状

### （１）町の概要

金山町は、山形県の北東部（最上郡）に位置しており、面積は 161.79 ㎢（山形県面積の 1.7%、最上郡面積の 8.9%）その約 66%が山林と典型的な中山間地域である。人口は 5,674 人（平成 29 年 12 月末日現在）と小規模自治体であるが、大正 14 年 1 月 1 日の町制施行以来、市町村合併の経験がなく現在に至っている。特産品として「金山杉」が有名であり、町の宝である子どもたちの健やかな成長を願い「金山杉のように美しい年輪を重ね、真っ直ぐに生きなさい」というはなむけの言葉を卒業式など旅立ちの場面ではよく耳にする。

---

[1]　0 歳児健診時などに「絵本」をプレゼントし、赤ちゃんと保護者が、絵本を介して心が触れ合うひとときを持つきっかけを届ける活動のこと。

（２）人口動態と児童生徒の状況

昭和 25 年の 10,299 人をピークに減少が続いており、平成 22 年には 6,365 人と、ピーク時の 6 割程度まで人口が減少している。国立社会保障・人口問題研究所の推計方法に準拠すると、更に平成 52 年には 4,064 人、平成 22 年の 6 割程度まで減少すると見込まれている。また、年少人口（0～14 歳）、生産年齢人口（15～64 歳）はともに減少を続けており今後も減少傾向が続くと見込まれている。

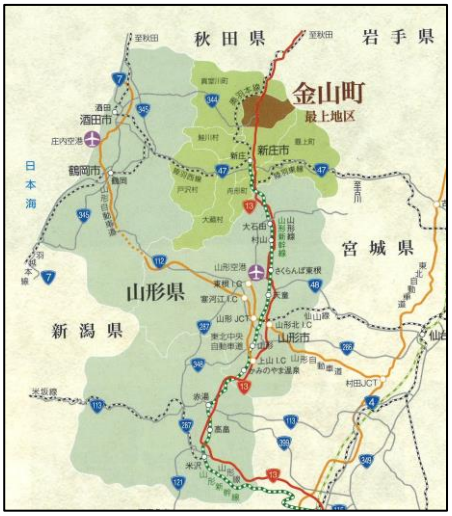


図１　金山町観光パンフレットより加工

児童生徒数の推計も年度毎の増減は多少あるが、一年あたりの出生数はこの 10 数年は 40 人前後で推移している。平成 25 年度出生者数は 33 名と初めて 40 人を割り込み、今後は 30～40 人台を推移するものと思われる。その結果、町内 3 小学校のうち小規模校 2 校では全ての学年において複式学級編制となり、唯一の大規模校でも学年 1 学級という編制に固定化されつつある。この現状が、子どもたちの読書活動との向き合い方や学校、家庭における環境づくりや働きかけに大きな影響を与えることは容易に想像できる。なぜなら金山という小さな町の中に、大規模校（＝地域と一定の距離感がある）と小規模校（＝地域との距離感が近い）が混在するため、画一的な取組で同程度の効果を得ることは非常に難しいと考えられるからである。

（３）町唯一のおはなしサークルの活動

このような状況ではあるが、町唯一の「おはなしサークルきつねのボタン（以下、「きつねのボタン」という。）」の活動が非常に重要である。

このサークルは、今から 20 数年前、最初は我が子と楽しい時間を過ごしたいという純粋な母の思いから活動が始まった。子どもが成長してからは、町の子どもたちにも楽しい時間を過ごしてほしいと願う同志が集まって活動をしている。年 2 回のおはなし会や町内外の幼稚園、小学校、特別支援学校、その他イベントなどの読み聞かせで知識と経験を重ね、現在では町の子ども図書室「森の子ども図書」の管理人、町内小中学校への読み聞かせや図書支援活動、認定こども園や町事業でのおはなし会の開催、ブックスタートスタッフなど町の読書活動推進には欠かすことのできない存在である。また、学校規模の違いにより様々な課題を抱える当町にとって、同じサークルが全ての学校、こども園に関わりを持っていることは強みでもある。

２．金山町における活動と課題

（１）ブックスタート（平成 16 年 10 月から実施）

10 数年以上前、町幼児教育懇話会にて「親子のふれあい不足」が話題になっていた。当時の町家庭教育目標「一人ひとりを尊重し、豊かな身体と心を育てる」には、どうしたらよいのか、子どもたちの感性を磨き、豊かな言葉と心を育てるには何をすべきか、が議論

されていた。適時適育では“乳幼児期は、親子の基本的な信頼関係の構築が重要である”と謳っているが、何か良い手立てはないのか、と議論した結果、親子のふれあいやコミュニケーションを深めるツールとして「絵本」を活用してはということになり、ブックスタートを実施することにした。この事業は“子育ては親への働きかけ”から“子どもへ働きかけその姿の変化から親が学ぶ”へ180度考え方を転換したものであり、画期的であった。県内でもかなり早い時期での開催であり先駆性が垣間見える。

また、事業の実施に当たり「きつねのボタン」が企画立案及び事業運営に携わることで、その後の事業へのスムーズな橋渡し役にもなっている。

ブックスタートは、乳児健診の待ち時間を利用して、町で出生した子どもに対して行っており、教育委員会部局と福祉部局との連携が欠かせないが、「子育てを応援したい」「健やかで心豊かな子どもたちを育てたい」という願いは同じであるものの、お互いの理解不足から行き違いが生じていた。

（２）読み聞かせとわらべうた（平成26年度から実施）

ブックスタート実施後、その後に続く事業の構築が長年の課題であったが、約10年後に親子のふれあいの観点を継承した事業づくりが行われた。わらべうた遊びという若い親にとっては経験の少ない活動であるが、いつの時代も子どもたちはふれあい遊びが大好きだと感じられる事業となった。

その一方で、今の若い親世代の読み聞かせやわらべうた遊びへの認知度が低く、参加するに至るまでの取組が大きな課題である。親自身が幼少期の体験が少ないことや、自分自身の楽しみを優先することなどが大きな原因と考えられる。

（３）子育て支援センターでの読み聞かせ活動（平成26年度から実施）

町はブックスタートで“親子のふれあい”を伝え、併せて大人も自然に読み聞かせや読書の心地よさを感じ、家庭での取組に繋がるよう意識的に取り組んできた。

具体的には、「きつねのボタン」による定期的な読み聞かせを開催し、認定こども園や小中学校との継続性を持たせ、読み聞かせに対する心地よさを親子一緒に感じてもらい、家庭でも取り組んでもらうことである。

昨年度からは、早期からの取組がより効果的だということで、福祉部局主催のマタニティ教室において「きつねのボタン」による読み聞かせを行い、父母から好評を得ている。ある父親は、読み聞かせの心地良さから涙を流したそうだ。これまでの少ない経験の中で「何か」を感じ取ったと考えられる。

しかし、この事例から町が意識的に取り組んできたこれらの思いが正確に伝わっていないことが明らかになり、事業内容の構成について改めて検討する必要がある。

（４）教育関係機関での活動

「きつねのボタン」による読み聞かせ活動は、認定こども園（旧幼稚園）や小学校にて、20数年継続しており、子どもたちにとって週一回の読み聞かせは習慣化されている。その取組を拡大して平成25年度からは、中学校でも朝の読み聞かせを開始した。特に目新しいことではないが、成長によって同じ本でも見方、考え方、感じ方が違うなど別の楽しみ方を見つけているようだ。

教育現場における読み聞かせ活動では、落ち着いた学校生活を送ること、聞く力、想像力及び発想力を育てるだけではなく、メディアを通じて日々晒されている負の言葉（他人を誹謗中傷する言葉など）から、絵本の中にある正の言葉（作者の意図する癒しや励まし、勇気づけなど）を読み手が意識して発信している部分もある。

また平成24年度からは、学校図書館整備などの図書支援活動を行っている。図書委員との活動を通じて子どもたちとの交流を深め実態把握もしている。

（５）現状から見える課題

以上のことから、環境づくりの大部分は出来上がっているが、子どもたちの読書への興味関心は、学年進行とともに薄れていく傾向がある。また、学年が上がるにつれて図書館利用が急激に減少し、自分の好きな本を選び読むことから、発達段階に応じた適切な＜動機づけ＞を考える必要がある。学校生活が多忙になり、読書に対する二極化も急激に進む時期でもあり、従来の紙ベースの読書だけではなく電子書籍などの活用も場合によっては考慮すべきであると考える。

発達段階に応じた適切な＜動機づけ＞を考える上で、主として子どもたちへの働きかけだけではなく、親への働きかけも欠かせないが、絶対的な経験値が不足している中での取組には工夫を要する。例えば親へ、いきなり「本を読みましょう」としても、読書に対するモチベーションも低く、どんな本を読んだらいいのか分からないのだから、子どもたちよりも困難さが予想される。

考察を進めていく中で、発達段階の中で最も重要な時期である乳幼児期にブックスタートに始まる読み聞かせを行うことは親子の信頼関係を構築するためにも重要だが、その部分について家庭・地域・教育関係機関・行政のいずれも連続性かつ段階性を持つ取り組みだということを、正確に認識していないことが大きな課題であり＜動機づけ＞を探るポイントになるのではないか。

３．課題解決のための事例研究

（１）NPOブックスタート

ブックスタートは、1992 年イギリスで始まった活動で、 絵本を読む（read books）ではなく、絵本を開く楽しいひとときを分かち合う（share books）がねらいである。日本では、2000年の「こども読書年」を機に全国各地で行われている。NPOブックスタートは、全国各地への情報提供とサポート、研修の実施などを行っており、各地の現状と課題を踏まえてお話しを伺った。

| 月齢 | メリット | デメリット |
|---|---|---|
| 3･4月 | ・健診の緊張を和らげる<br>・楽しい時間を伝えるにはベスト<br>→育児スタイルが出来る前に | ・反応が分かりにくい（笑うなど）<br>→継続しにくい？ |
| 5･6月 | ・反応が分かりやすい（笑うなど）<br>→継続しやすい（期待できる） | ・楽しい時間を伝えられる限度<br>→育児スタイルの完成間近？ |
| 9･10月 | ・明らかな反応がある<br>→継続しやすそうだが… | ・読み聞かせへの適不適が明確に<br>→育児スタイルに左右される |

**【図2】月齢から見るブックスタート**
**（NPOブックスタートの情報に基づき筆者作成）**

ブックスタートは、“親子のふれあ

い”を中心とした活動の中の一つだが、「そこにある絵本を読むだけでいい」という気軽さが特色である。わらべうたやベビーマッサージは、歌や手順を覚える必要があるが、絵本があれば「いつでも・どこでも・誰とでも」が可能になる。

実施時期は、多くの自治体では 3・4 か月又は 5・6 か月頃の乳児健診で保健師の協力を得て行うことが多いが、いずれの時期にもメリットデメリットがある。【図 2】より 5・6 か月頃が最も父母の分かりやすい反応（声を上げる、笑うなど）が得られ、家庭での継続に繋がるとのことだった。逆にそれ以外の時期で実施した場合、分かりやすい反応が見られる時期に改めて＜動機づけ＞を行うのが望ましいと思われる。

この部分を正確に捉えることは、乳児健診を行う保健師にとっても心身の発達と親子の愛着形成が進んでいるかを確認する上でも非常に大きなメリットになることが分かる。

話の中で特に心に残ったのは、もっと大きな視点で考えること、最終的に読書することがゴールではないこと、ブックスタートは子どもだけではなく活動に関わる人々（ボランティア、保健師、行政職員など）も成長させる取組である。

また幼い頃の温かな思い出は人の土台となる自己肯定感を育み、地域への愛着、学力向上へと繋がること、当町は環境が整っているので、関わる人が正しく理解して進められるよう支援することをアドバイスしていただいた。

（2）岩手県釜石市

①子ども読書活動推進計画について

釜石市では、第 3 次子ども読書活動推進計画の策定に当たり、㋐学校図書館との連携、㋑来館困難者への対応の 2 点を重点項目にしている。

㋐学校図書館との連携では、現状把握及び行政の関わり方を検討し、教科書関連図書の長期貸出に対応するため市立図書館では 0～8 分類【図 3】を充実させ限りある予算の有効活用とバランスを保っている。また、図書館主催の、岩手大学生及び首都圏大学生による夏季休業中の学習支援など、キャリア教育に繋がる大きな視点に立った取り組みが行われている。

| 分類記号 | 主な内容 |
|---|---|
| 0　総記 | 百科事典・年鑑など（調べる本） |
| 1　哲学 | 哲学、宗教など（心理・道徳・ものの考え方・生き方） |
| 2　歴史 | 歴史、地理、伝記（人々が行ってきたこと・地域の様子） |
| 3　社会科学 | 政治、経済など（社会の仕組み・人々の生活・伝説） |
| 4　自然科学 | 自然科学（数学、物理、化学など） |
| 5　技術・工業 | 技術・工学（建築、機械、製造、乗り物、家庭など） |
| 6　産業 | 産業（農林水産業、商業、交通など） |
| 7　芸術 | 芸術（音楽、彫刻、絵画、スポーツ、演劇など） |
| 8　言語 | 言語（言葉、日本語、外国語、辞典など） |
| 9　文学 | 文学（物語、詩、短歌、俳句など） |

**【図 3】日本十進分類法による図書分類（筆者作成）**

㋑来館困難者への対応では、遠隔地小学校の児童向けに月 1 回の移動図書が行われている。

また「絵本カー」での貸出しや、ボランティアによる読み聞かせが児童育成施設、仮設住宅や高齢者施設等で行われており、子どもだけではなく大人の中にも自然に読書や読み聞かせがゆっくりと浸透していく取り組みとなっている。これは、地域の多様な目で見守っていくことにも繋がり、保健師や福祉部局との連携にも効果的である。

②課題を解決するための取組

課題は、ほぼ当町と同じであり、解決するための取組は、大きく 3 点である。

㋐住民・職員の意識

昭和 40 年から取り組んでいる「教育振興運動」は、子ども・親・学校・地域・行政が一体となり教育課題解決に取り組み、教育環境の整備や充実に大きな役割を果たしている。長い年月を経て醸成された教育への県民の意識は、親から子、孫へと確実に受け継がれ、東日本大震災後も読書に対する意識は、むしろ強くなり、義務教育期の児童生徒の不読率は 1%以下という調査結果には目を見張る。

認定こども園に併設されている子育て支援センターでは、入園前の乳幼児が 4 組ほど集まり「絵本カー」での貸出しと読み聞かせが行われていた。当日の参加状況を見て選書するため、読み手の高度なスキルが求められるが、子どもたちは食べ物やしかけ絵本に興味津々で、保護者も一緒の時間を楽しんでおり、これが長い時間をかけて醸成された意識なのだと実感した。

㋑司書教諭等の配置

学校司書教諭は、小学校 2 校、中学校 1 校に配置されている。配置は努力義務で有資格者の確保と財政状況に左右される部分だが、教育環境の整備と充実のため配置している。足りない部分は、資質向上研修を行いながらボランティアを活用している。

㋒福祉部局（保健師）との連携

当初は交流も少なかったが、健やかな子どもを育てたい願いを持つ同志として相互理解に至り、現在では 5 か月の離乳食教室で実施しているブックスタートの説明時間を 30 分設けるなどの連携を行っている。

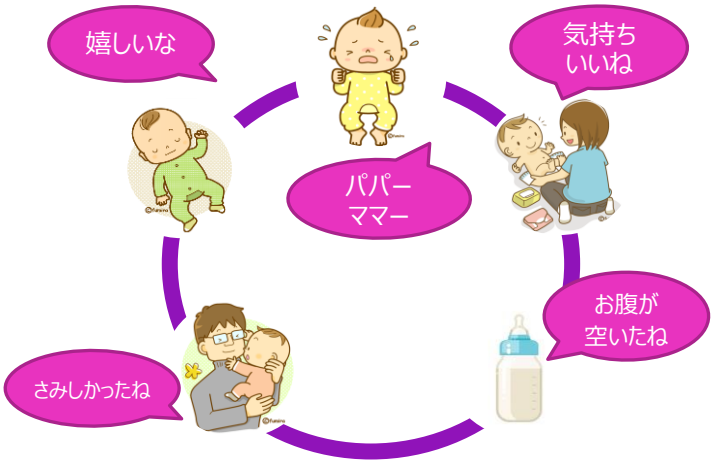
また、子どもが父母の分かりやすい反応を示し、読み聞かせへもスムーズに移行している様子からも大きな視点での取組の成果であり、第 3 節（1）の指摘の裏付けになった。

（3）絵本専門士（山形県酒田市）

山形県は、ブックスタートや読み聞かせ活動が盛んな地域で、特に、平成 17 年 11 月に 1 市 3 町が合併し誕生した酒田市は、県内でも先進地の一つである。同市在住の絵本専門士（絵本に関する高度な知識、技能及び感性を備えた絵本の専門家）加藤美穂子さんから、大きく 3 点のお話を伺った。

①ブックスタートは愛情表現の具体的な形

赤ちゃんは、泣くことで感情を表現する。父母は泣き声や表情からミルク、抱っこ、おしめを見極め、語りかける。その繰り返しが、親子の信頼関係となり、十分に満たされると人を信じる心が育ち、知的好奇心を満たすための活動へと繋がっていく。




【図 4】親子の信頼関係ができるまで（筆者作成）

つまりスキンシップと語りかけ（読み聞かせ）は、親子の愛情表現の具体的な形であり、その両方を満たすものがブックスタートということになる。

②学校教育に繋がる「言葉を理解し、使えて、書けること」

多くの親は、「健康で思いやりのある賢い子に育ってほしい」と願っている。そのためには「見えないものを信じる心」と「言葉を理解し、使えて、書けること」を身に着ける必要がある。前者は、親子の信頼関係から育つが、後者を育てる初めの一歩は、やはりブックスタートである。

学校教育が成立する大前提は、話を聞くことであり後に理解へと繋がる。家族や友達とのおしゃべりや絵本の読み聞かせは、話を聞く力を育むには効果的だが、意識して取組まなければ期待する成果は生まれない。学校側も全ての始まりはブックスタートであることを理解しなければならない。

③環境づくりの大切さ

当町のように公立図書館のない自治体は、学校図書館の整備、特に前節でも述べたが 0～8 分野の充実が不可欠である。なぜなら、実生活に役立つ知識や情報が満載だからである。この指摘は、釜石市立図書館での取組を裏付けるものであった。図書館整備では、文学に偏りやすく、結果として読み聞かせで育った意欲を削ぐ可能性があることを忘れてはならない。

また、言葉は生きものであり時代に沿って変化している。児童文学作家のひこ・田中さんは「現在出版されている本は、今を生きる人の心を解決するためのツールが含まれている。古い本の中にも優れたものはたくさんあるが、それはその時代の問題を解決するためのものでもある。」と話されたそうだ。“今を生きる子どもが、今の本を手に取りやすい環境づくり”の大切さを痛感した。

## ４．金山町における＜動機づけ＞とは

これまで発達段階に応じた適切な＜動機づけ＞を様々な視点で見てきた。人の発達段階は連続していることから、読み聞かせから読書活動、その先に期待する学力向上を考えた場合も同様に連続性を意識した取り組みが必要であり、視察先でもその部分を重要視していることが分かった。

近年の教育環境では、家庭教育と学校教育の接続期において生活科を中心とした取り組み（山形県では、「幼保小連携スタートプログラム」）が行われており、その部分には家庭、学校、行政そして関係機関の連携が密接に行われている。

以上のことから、①人としての土台づくりである「家庭教育」、②知識や学力を育てる「学校教育」、③それらを支援する「行政の役割」、④そして全ての事業を動かしていく「関係機関との連携」の 4 点を＜動機づけ＞の重要なポイントとして考えた。

### （１）家庭教育

最初は、あくまでも“ブックスタート＝親子のふれあい・楽しい時間”という捉え方が望ましく「種まき期」であることを引き続き意識づけたい。人としての土台づくりであり信頼感や自己肯定感を育てることに繋がるからである。土台が不安定では、積み上げてい

く道徳心や学力が揺らぐ。これは学校も認識しており、確かな学力は自己肯定感と規則正しい生活の上に育つことが、全国学力・学習状況等調査の結果からも分かっている。

併せて、家庭でも継続するために、最も効果的な時期である 5・6 か月頃に改めて＜動機づけ＞が可能な仕組みをつくることが大切である。例えば、当町で行っているベビーマッサージ講座などは､熱心な参加者も多いことから＜動機づけ＞の時期としては最適である。

また、読み聞かせ・わらべうた講座への参加、子育て支援センターなどでも意図的に＜動機づけ＞を行うことでさらに効果は高まると思われる。

幼児期からは、兄弟間のトラブルや最近話題のネット関連を題材とした絵本などを適宜紹介することで、誰でも経験することだから感情移入しやすい利点もある。

また、その頃になると好みがはっきりしてくるので、個性を伸ばすためにも十分に満足するまで好きな本を与えることも効果的である。

（２）学校教育

行政だけではなく地域、学校でも活動の中身を正しく理解するとともに事業の継続性を意識させることが必要である。“親子のふれあい・楽しい時間”を通じて形成された信頼感や自己肯定感があって、次に読書活動があることを理解しなければならない。「芽が出て、大きく育ち花が咲く」ことを意識した水や肥料を与える時期である。

学習内容の高度化が進み、つまずき感を覚える児童生徒も出てくるため、学校図書館の充実（詳細は、第 3 節（２）を参照。）を図りたい。家庭において、日々の生活に役立つ読書を身に着けていると、抽象的な学習につまずいても、具体的なところまで戻って学習することが可能になり、問題解決力を育てるきっかけにもなる。

また、学校生活での経験を題材にした絵本や物語を通じて、道徳心や社会性を育むことができる。どうしても国語力や読解力の向上を期待して文学に向かいがちだが、あくまでも“本に親しむ楽しい時間”であることが大切である。

最も重要なことは、教員が意識を変えていくことである。楽しいはずの読み聞かせや読書の時間が、自習や静かにさせるためだけの読書になっては、これまでの積み重ねが崩れてしまう。例えば、一日の始まりにはワクワクするような絵本を、クラスでケンカがあった日の帰りには、心が穏やかになるような絵本を読んでみてはどうか。当町の子どもたちなら、幼い頃に家族と過ごした楽しい時間を思い出すに違いない。もし、家庭でそのような経験が少なかったとしても、先生から聞いた温かなお話しは、子どもの心にずっと残るだろう。読書活動にも発達段階と同じように連続するステップが必要であることを理解するとともに、前の積み残しを見極める力と、補う力も併せて必要である。

（３）行政の役割

①ソフト的な環境づくり

少子高齢化と人口減少が進む中での教育予算の確保も容易ではないが、人づくりは将来のまちづくりを担う人財を育てるためには重要なことである。例えば、公立図書館のない当町では、学校図書館の整備を行うことで、読書における幼児期から学童期へのスムーズな移行と、調べ学習などの学習形態に対応が可能となる。そのためにも、司書教諭やボランティアの配置と育成が必要である。

②大きな視点で事業を捉える

振り返りや修正を行いながら、長期的な視点で事業を捉えて継続していくことが必要である。併せてコーディネーターとしての役割が期待されているが、人事異動による停滞を防ぐためにも、日々学び続けることが大切である。

③諦めない

最も大切なことは、短期間で大きな成果が現れなくても諦めないことである。「国家百年の計は教育にあり[2]」と言われる程、教育こそが国家の要であり大きな視点で人を育てることが大切である。

人を育てるには、長い年月と忍耐が必要だが、将来の可能性を信じ諦めずに愛情をもって働きかけること、目先の効果ではなく何年、何十年後に期待することが教育に携わる者に求められる姿勢である。反面、方策を誤れば取り返しがつかないことからも、慎重かつ速やかで的確な判断を要する。

（４）関係機関との連携

第２節（１）にて、横の連携の難しさに触れているが、教育委員会部局と福祉部局のどちらが悪いということではなく、歩みよりと相互理解が足りなかったのだと感じている。

ブックスタートの場合は、どちらも健やかな子どもたちが育ってほしいと願っているのだから、その部分を様々な角度で共有し、事業をすることで「ウィン・ウィン」の関係づくりができれば良かったのだと思う。お話を伺ったNPOブックスタートや釜石市では、アンケートや聞き取りを活用して、双方の事業の有意性を客観的に分析し、共有した。そこがすべてのスタートである。

今、教育委員会部局と福祉部局が「ウィン・ウィン」の関係づくりをするためにできることを考えると、やはり発達段階に応じた適切な＜動機づけ＞が近道である。絵本を見て子どもが笑ったり喜べば、父母も周りの大人も笑顔になる、それは当町が大切にしてきた“親子のふれあい・楽しい時間”に繋がっている。その姿は、きっと福祉部局の目にも温かで有意なものとなるだろう。全ては、事業の持つ連続性かつ段階性の理解の不足が原因である。

本レポートでは、学校教育における＜動機づけ＞に触れている。今後、自分を含めて更に教職員も意識を変えていくためには、福祉部局との「ウィン・ウィン」の関係づくりに気付けたことが、大きな力になると思う。

本レポートで取り上げている発達段階における＜動機づけ＞を考える場合、学校へ入っていくことは避けられない。これまでは、熱意と強い意志を持って向かうことを考えてきたが、相手に歩み寄り理解できる関係づくりをしていきたい。自分が切り開くのではなく、橋渡しをしたいと強く思う。自分にそのような役割が与えられるとすれば、持てる全ての力をもって取り組みたい。

---

[2] 国家の終身計画のこと。元々人材育成の思想だったが転用され、それ以外でも国家百年の計という言葉を使うことがある。春秋戦国時代の斉の政治家、菅仲の言葉とされている。

おわりに

本レポートの発端は、担当者としての疑問からだが、約 6 年という時間をかけて一つのことにじっくり向き合い、自分なりの答えを導き出せたことは、大きな財産である。

NPO ブックスタートで伺った「ブックスタートは関わる全ての人の育ちがある事業」という言葉が、今、心から理解し納得できる自分がいる。

全国地域リーダー養成塾に入塾する際の小論文で、これからは、多くのことを知りたいと思える人を育てる人づくり、思いが先走りしたときに優しくブレーキをかけてくれるような人づくりをしていきたいと書いたが、本レポートを書いたことでその思いが更に強くなったように感じる。

地域リーダーとなる地域人財と将来を担う子どもたち、まちづくりに欠かせない人づくりの大切さと重さを改めて理解し、金山町らしい人づくりを自分なりに考え続けていきたい。

【参考文献・資料】

・大川美栄子（2015）『9 歳までに地頭を鍛える!37 の秘訣・“ギフティッド”を育てた母親の体験的教育論』扶桑社
・金山町（2015）金山町人口ビジョン
・金山町（2017）まちづくりノート（金山町主要施策）
・金山町（2017）まちのすがた
・金山町教育委員会（2017）金山町子ども読書活動推進計画
・金山町教育委員会（2016）楽しい時間を分かち合うために～ブックスタート 10 年の歩み～
・金山町教育委員会（2017）適時適育の金山の教育（金山町教育の重点）
・釜石市（2015）かまいし読書プラン 2015 第 3 次釜石市子どもの読書活動推進計画
・酒田市教育委員会（2016）第 2 次酒田市子ども読書活動推進計画
・NPO ブックスタート（2010）『赤ちゃんと絵本をひらいたら～ブックスタートはじまりの 10 年～』岩波書店